



の中の

子どもたち

第18回 思い出のマーニー

—私は誰?—

川崎 二三彦

忘れるしあわせ

「思い出のマーニー」ならば、イギリス児童文学の有名な作品だ。だからご多分に漏れず、私も何かのきっかけで読んだことがある。ただし、「何かしら不思議なストーリーだったな」というような印象が記憶の彼方にぼんやりと浮かぶだけで、内容はさっぱり思い出せない。

気になって映画館に出かけてみたら…。物語はどんどん進んでいくのに、最後まで何も思い出せなかった。でも、たぶんそれが良かった。なにしろ新鮮な気持ちで映画に浸り、新鮮な感動があったから。これを「忘れることのしあわせ」と、言うはずはないか…。昨今は、忘れ続ける日々にはしばしば困っているのだから。

ただし映画のタイトルは「思い出のマーニー」。映画を観ている間はその意味がわからなかったけれど、見終わったときには、なるほどと納得。

「そうだったんだ、この物語は」

エンドタイトルで「おわり」が打れたとき、私はしあわせな気分になった。我が身が浄化されたんでしょうね、きっと。

「私は、私が嫌い」

さて、開始早々に、主人公の一人杏奈がこんなことを言う。



「私は、私が嫌い」

この台詞が、この映画のキーワードの一つだろう。

「本作を見て、私はたしかに、過去の自分のありようを鮮明に思い出したのだが、しかし、鑑賞中、それは過去ではなく、『いま』だった。『私にもこんな感情があったなあ』となつかしむのではなく、『いまこの瞬間、十代である自分』をマーニーや杏奈と生き直しているような、そんな生々しさをひたすらスクリーンを見つめつづけた」

「(本作は)『大人を慰撫し、郷愁へ誘う作品』では断じてなく…」

と熱くパンフに書いたのは、作家の三浦しをん。残念ながら、私はそこまでの生々しさを感じることはできなかった。もしかしたら人生が枯れかけているから? かどうかはともかく、転地療養を理由に、優しさいっぱいなのになぜか息苦しい養育家庭を逃れ、海辺の親戚宅で一夏を過ごした杏奈が、「私が嫌いな私」をいつのまにか昇華させ、最後のシーンで「しあわせよ」と口にしたのは十分理解できたし、それを実感できる映画だったからこそ、観ていた私も「しあわせ」に浸ることができたのではないだろうか。

マーニーの登場

長く空き家になっていて、「湿^{しめ}っち屋敷」などと呼ばれている洋館が本作の舞台である。

「あそこには行っちゃだめだよ」

という忠告を聞きながら、なぜか屋敷に惹かれる杏奈の前にマーニーが立ち現れる場面は、なかなか工夫が凝らされている。実は、こういうあり得ない設定を、私は苦手に行っているのだけれど、アニメ作品の強みなのか、マーニーと杏奈が、「私たちのことは秘



密よ」と言いながら親しくなっていく展開は、観ていて自然に応援したくなかった。

「一晩に3つずつ、質問することにしませう」

こんなことを思いついただけで、心が躍るような気分に入れられ、楽しくてしかたがない少女たち。

私にとってそれは、三浦しをんが言う「いま」ではなく、かといって「郷愁」でもないけれど、「憧憬」のようなものだったのかも知れない。

「湿っち屋敷」から忽然と現れたマーニーが、一体何者であるかはわからなかったとしても、彼女の登場は、杏奈を過去の自分から解き放す触媒として十分な存在だったに違いない。そのことを証拠立てるエピソードの一つが、杏奈が打ち明ける気持ちになった「すごい秘密」だろう。

すごい秘密

かつて、児童相談所で児童福祉司をしていた頃の事だ。非行相談でやって来た中学生との面接を終えた心理判定員が、こんな報告をする。

「彼、変なことを聞いてくるんだ」

「えっ、どういうこと？」

「『相談費用はいくらだ?』ってね」

思わず笑ってしまった。児童相談所は公的機関だから、むろん相談は無料であり、私は面接の最初に、誰によらず必ずそのことは説明していた。が、それは保護者に対してであり、そんなことを子どもに話したことはない。それを、日頃学校で教師に反抗し、親に反発している当の本人が心配していたというのだから、笑うしかあるまい。

彼の相談が、その後順調に進んで終了したことは言うまでもない。

杏奈の「すごい秘密」を聞いたとき、私は瞬時に彼のことを思い出した。もっとも、杏奈の場合は彼とは逆で、養育家庭に、つまりは<自分>にお金が支給されることが、人には言えない悩みの原因だった。とはいえ、この時期の子どもたちが、大人があまり考えないような悩みをかかえて生きているという点では変わらない。そういえば私自身も、叔母の家に下宿していた高校時代、財布をなくして困ったとき、「いくら入っていたの」と問われてどうしてもその額を口にできず、悶々とした記憶が蘇ってきた。

本作は、思春期のそんなさまざまなエピソードを知らず知らずのうちに呼び覚ます。秀作の所以であろう。

エンディング

こんなことが重なって、映画はエンディングを迎え、マーニーが誰であって、杏奈がなぜマーニーと出会わなければならなかったのかが、明らかになる。そして、杏奈自身が自分が誰であるかを理解する……。

こうして夏が終わり、気づくと、彼女を迎えに来た母、ではなく<おばちゃん>との間にあった気づまりは雲散霧消している……。多忙な私たちにも、時にはこんな映画が必要だったんだと、つくづく思った次第。

* 2014 / 日本

* 鑑賞データ 2014/08/25 横浜ブルク 13

* 公式 HP <http://marnie.jp/index.html>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/36657>

第 1 回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第 2 回	クロッシング	
第 3 回	冬の小鳥	
第 4 回	その街のこども	
第 5 回	八日目の蟬	
第 6 回	いのちの子ども	
第 7 回	ラビット・ホール	
第 8 回	サラの鍵	
第 9 回	少年と自転車	
第 10 回	オレンジと太陽	
第 11 回	孤独なツバメたち	
第 12 回	明日の空の向こうに	
第 13 回	旅立ちの島唄	
第 14 回	くちづけ	
第 15 回	もうひとりの息子	
第 16 回	メイジーの瞳	
第 17 回	ファイ	